甲州市武田家絵巻

武田家の歴史をひもとくと、甲州市が見えてくる・・・

甲州市武田家絵巻
発　行　山梨県甲州市
〒404-8501　山梨県甲州市塩山上於曽 1085-1
TEL 0553-32-2111（代表）
HP　http://www.city.koshu.yamanashi.jp
制　作　（株）サンニチ印刷

信玄が自戒した画を蔵する【熊野神社】

熊野神社には武田信玄が座右に懸けて自戒したという「紙本著色歇器ノ図」や、飯縄信仰を示す「紙本著色飯縄権現像図」などが納められています。熊野神社は大同二年（八〇七）紀伊熊野神社から勧請しています。本殿は六棟ありますが、そのうち東の二棟は室町時代中期の建築で、拝殿は室町時代末期の様式を伝えており、ともに重要文化財です。

左：紙本著色飯縄権現像図
右：紙本著色歇器ノ図

熊野神社

勝沼の地に残る【勝沼氏館跡と金の精錬】

勝沼の勝沼氏館跡（国史跡）は『甲斐国志』によると「勝沼五郎信友の城跡なり」とあります。信友は武田信虎の弟です。一九七三年に学術調査がおこなわれ、一九七七年に館跡の全容が解明され、総面積は約四万七〇〇〇平方メートル、土塁と堀に囲まれた典型的な戦国時代武将の居館であることがわかりました。内郭部から金が付着した土器が出土しており、黒川金山産出の金の一部はこの館で精錬されたと考えられます。

勝沼氏館跡

盛期

信玄の財政力は黒川金山

信玄は経済力を拡大し、多額の軍資金を確保するため産業振興を行いました。もっとも力を注いだのは金山経営で、とりわけ黒川金山は名高く「黒川千軒」と語られるほど大規模でした。掘り出された金は一定量の大きさに鋳造され、「甲州金」「甲金」と呼ばれる貨幣として、武田家の財政基盤となりました。

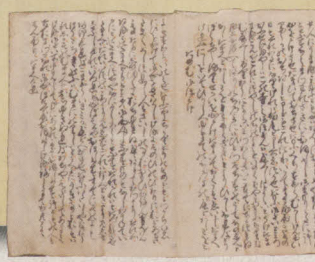
黒川金山は黒川鶏冠山東面の黒川谷源流に位置し、採掘の坑道や石垣、精錬や居住のために造成された大小さまざまな平坦地があり、工具や生活用具が出土しています。山中といえど、たいへんな賑わいだったのでしょう。金山には、金のきらびやかさとはうらはらに暗いイメージがつきまといますが、当時もっとも進んだ技術が集まった場所でもありました。また、熊野神社周辺や下於曽地区には、金山衆の屋敷の遺構や古文書などが遺されています。

こうした財政力を支えに、信玄は諸国を制圧していきました。その領国形成は、甲斐を中心に、駿河一円、信濃の大半、上野・遠江・三河の各数郡、さらに、美濃、

大善寺本堂（国宝）

【理慶尼記】

新府城を捨て、岩殿城へ逃れようとした勝頼主従は、大善寺に一泊し理慶尼とともに薬師堂で武運長久を祈願しました。しかし、岩殿城主・小山田信茂の裏切りに遭い、前途を失います。この武田家の滅亡を記録したのが「理慶尼記」。理慶尼の父は、信虎の弟・勝沼五郎信友ですが、信友の子・信元の時、謀反の疑いで勝沼氏は滅ぼされます。理慶尼にとって勝頼はいわば仇敵ですが、それだけに慈悲の心にうたれます。


理慶尼記

【栖雲寺】

木賊の地域の人々に守られる

滅亡

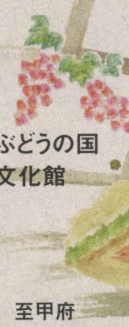
信玄倒れ、勝頼は日川渓谷へ

天下取りの夢を叶えるため、信玄は元亀三年（一五七二）十月、京を目指して最後の出陣をします。五十二歳。すでに病は重かったといいます。武田軍は徳川家康に大打撃を与えて進軍、野田城を落とし、長篠城へ入ります。天下に号令する日は、すぐ目の前でした。

しかし、病状は悪化、四月十二日、帰国の途で他界します。遺言は「三年の間、わが喪を秘すべし」。夢は勝頼に託されました。ところが、天正三年（一五七五）、勝頼は長篠の戦いで織田・徳川の連合軍に大敗。いちじるしく勢力を失っていきました。

勝頼は天正十年（一五八二）三月、連合軍が南北から侵攻してくると、入城して二ヶ月ほどしかたっていない未完成の新府城を捨て、岩殿城へ向かいます。しかし、味方に裏切られ天目山へと逃れますが、織田・徳川の連合軍に阻まれ、それもかなわず、田野の地で一族と家臣は自決。ついに、新羅三郎義光以来、五百年続いた甲斐源氏の流れをくむ武田家は滅亡しました。

四百余年経った今でも、武田家が歩ん



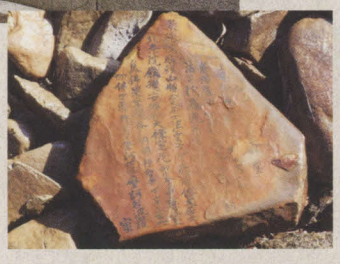
勝頼最期の地に建つ【景徳院】

天正十年（一五八二）三月十一日、天目山を目指した勝頼主従が、ついに果てた地。勝頼三十七歳、夫人十九歳、信勝十六歳。

景徳院は勝頼主従の菩提を弔うため、徳川家康の命により建てられました。境内の御霊屋「甲将殿」には勝頼親子の像と従者の位牌が納められ、甲将殿の背面には二百年遠忌として建立された墓があります。

近年、墓の基壇中から五千二百点を超える経石が出土し、当時の供養の篤さがしのばれました。

武田勝頼の墓


勝頼の戒名などを記した経石

武田信満の

栖雲寺は業海本浄が貞和四年（一三四八）に開山した寺です。寺には重要文化財の「普応国師坐像」、県指定文化財の「業海本浄坐像」など文化財が多く残されています。境内には上杉禅秀の乱に加担して天目山に果てた武田信満の墓があり、木賊の人々の信仰によって守られています。寺が所蔵している「虚空蔵菩薩画像」には十字架が描かれており、キリシタン大名・有馬晴信が所持していたと伝えられていますが、近年の調査で、中国の元の時代の絵画で、マニ教か景教のキリスト像と考えられています。

栖雲寺

武田家代々の重宝を納めた【雲峰寺】

雲峰寺は甲斐源氏による武運長久の祈願寺。室町時代には火災により焼失しましたが、信虎が再興に向け尽力しました。

武田家の誓盟の言葉に「御旗、楯無も照覧あれ」とあります。この旗は後冷泉天皇から下賜され、さらに新羅三郎義光から武田家代々に伝わり、日本最古の日の丸の旗といわれています。武田家滅亡のとき、家臣によって孫子の旗、諏訪神号旗、馬標旗とともに雲峰寺に納められました。

日の丸の御旗

馬標旗

諏訪神号旗

虚空蔵菩薩画像

が現在の甲州市です。

峡東の甲斐源氏の発祥【放光寺】

放光寺は、甲斐源氏新羅三郎義光の孫で、峡東一帯を統治した安田義定により源平の合戦で手柄を立てた後、建立されました。

本尊の「木造大日如来坐像」と「木造愛染明王坐像」は、京仏師が造像したもの。「木造不動明王立像」とともに、平安末期の作で国指定重要文化財。戦国時代には信玄が祈願寺としています。

放光寺

愛染明王坐像

恵林寺を築いた【夢窓国師と快川国師】

恵林寺三門

信玄は幼少のころ、古長禅寺の岐秀元伯について四書五経を学び、また、恵林寺の開山夢窓疎石以来の宗風である五山の教えを学びました。当時の五山の高僧惟高妙安・策彦周良を恵林寺住職に招いています。のちに関山派（妙心寺派）との関係を深め、永禄七年（一五六四）に快川紹喜が再住したのを機に、信玄は恵林寺を菩提寺としました。天正十年（一五八二）武田滅亡後、織田軍が火を放ったときに快川国師は「心頭滅却すれば火も自ら涼し」と炎に包ま

恵林寺庭園

武田家の発祥から滅亡まで

安田義定「壇ノ浦」で平家を討つ

発祥

平安時代、この地方を治めていたのは古代豪族・三枝氏でした。大善寺は、はじめ三枝氏の氏寺でしたが、のちには甲斐源氏、さらに武田氏の保護をうけました。

平安時代の末期、源平の合戦が日毎に激しさを増していたとき、この地から挙兵し平家を討伐し、その名を轟かせた武将がいます。甲斐源氏の安田義定（一一三四～一一九四）です。甲斐源氏は源平が争った内乱期に団結を強めた武士集団で鎌倉・室町時代と栄え、戦国時代には武田三代が天下取りの夢に挑みました。

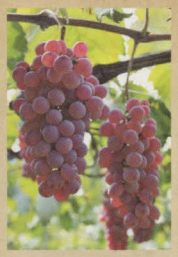
義定は甲斐源氏の祖・新羅三郎義光の孫にあたり、義清の四男。笛吹川の上流域から峡東一帯を治めていました。「平家物語」や「吾妻鏡」などの軍記に登場する活躍ぶりで、一ノ谷では敵将を討ち取り、ついに壇ノ浦において平家を滅亡させました。

信玄も奨励した果樹栽培

【甲州八珍果】

甲州八珍果とはブドウ、ナシ、モモ、カキ、クリ、リンゴ、ザクロ、クルミまたギンナンのことで、信玄が奨励したとか。柳沢吉保だとも伝えています。ブドウの由緒は古く、大善寺の薬師如来が右手にブドウを持っていたと伝えられています。山梨を代表するブドウ品種である「甲州種」は、現在ではワインの原料として国際登録されています。また、カキはコロガキのことで、信玄の時代に美濃国の蜂屋柿を移植改良したといわれています。松里地区の「枯露柿」は贈答品として全国的に有名です。

甘草屋敷



甲州ブドウ

民家の軒先に吊された枯露柿

向嶽寺、室町時代の

【中門と築地塀】

向嶽寺は度々の火災で諸堂を焼失しましたが、その都度再興され、総門、中門、仏殿開山堂、方丈が一直線上に配置される禅宗寺院の伽藍の特徴をよく残しています。中門は天文十一年（一五四二）の火災後再建されています。中門の両脇の築地塀は総延長三三・五メートル、厚み一・六メートルで強度を保つため小石と土と塩を混ぜていて、別名「塩築地」といい、向嶽寺開創に近い頃に造られたものです。寺には国宝の「絹本著色達磨図」をはじめ、多くの文化財を伝えています。

向嶽寺中門と築地塀

基盤

時代の中心地。ゆかりの史跡

放光寺は、義定が開基。わが国に三躯しかないといわれる天弓の愛染明王坐像をはじめ、重要文化財を多く伝えています。

甲州市には甲斐源氏の史跡が数多く、「於曽屋敷」もその一つ。平安時代の末期、古代豪族・三枝氏にかわって加賀美遠光の子・光経、光俊が当地に入り、「於曽氏」を名のりました。現在の於曽屋敷は光俊の屋敷と伝えられています。

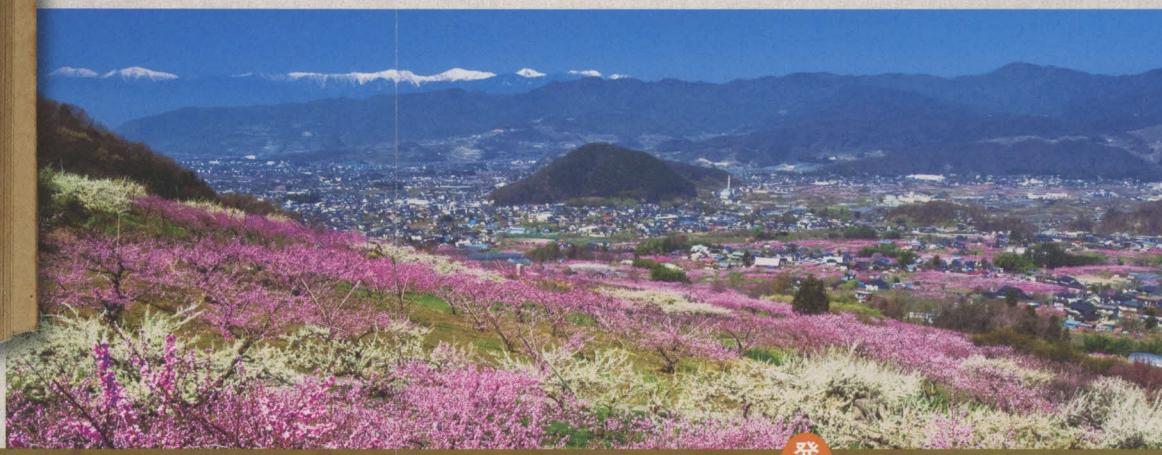
武田氏がこの地で活躍するのは、信武、信成、信春、信満の時代からです。信成は千野にあった継統院や、康暦二年（一三八〇）に抜隊得勝を迎え向嶽寺を創建しています。当時向嶽寺は修行専一の道場として「向嶽庵」を名乗っていましたが、のちに信玄の尽力により寺号が与えられました。

また、信成の子・信春の館はいまの慈徳院境内にあったといい、水路が巡らされ、「諸氏屋敷」「鹿子屋敷」「馬場」などの地名が残っています。大善寺本堂（薬師堂）の内陣厨子は、信春が文明五年（一四七三）に寄進しています。同じく大善寺の役行者倚像は、富士山信仰とかかわりのあった御坂嶺から信春が移し、のちに今日の藤切祭が行

慈雲寺

楯無鎧（国宝）

菅田天神社



女婿の上杉禅秀の乱に加担して、天目山にて果て、栖雲寺に墓があります。

戦国時代と武田信玄の躍進

発展

永正十七年（一五二〇）、領国の統一を成し遂げ甲府を開いたのは、武田信虎（一四九四～一五七四）です。これより、信玄（一五二一～一五七三）、勝頼（一五四六～一五八二）と、武田三代、六十五年間の領国経営がはじまっていきます。そして甲州市は、武田家の信仰・学問の地、産業振興の地として貢献し、さらには一族滅亡の地として、歴史を刻んでいくことになります。

信玄は、戦国時代のただなかに誕生しました。戦国時代とは、室町幕府の政治体制が崩れ、将軍の地位を巡っての勢力争いで守護大名が分裂、地方にまで及んだ内乱です。また、各地では飢饉や疫病が広がり、このことも他国への侵略や、戦いを深刻にしていきました。

天文十年（一五四一）、今川義元との共謀を企てたといわれる父・信虎を信玄は駿河へと追放しました。子が親を追放するという大事件であったにもかかわらず、

武田家代々の重宝・「楯無鎧」を祀った

【菅田天神社】

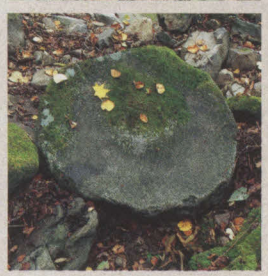
「楯無鎧」は「小桜韋威鎧」と呼ばれ、新羅三郎義光以来、「御旗」とともに武田家の宗家に受け継がれてきた重宝です。平安時代の古風な格調をもつ日本有数の鎧であり、国宝。伝えでは信玄が甲府の鬼門鎮護として菅田天神社に納めましたが、勝頼滅亡後は、家臣により向嶽寺の大杉の下に埋められました。このことを知り、再び菅田天神社に祀ったのは徳川家康です。

黒川千軒の守り神として尊崇された鶏冠神社（けいかんじんじゃ）

日本鉱山史の最重要遺跡

【黒川金山】

信玄の軍資金のみならず、経済の基盤を支えた甲州金を産出した黒川金山。現地は「黒川千軒」といわれる鉱山町で、寺院や神社があり、発掘調査では採掘に従事した人たちの生活用具も出土し、往時を偲ぶことができます。日本の鉱山史の最重要遺跡。技術力も優れ、武田家滅亡後「金山衆」と呼ばれた技術者は、各地に移り鉱山開発を行ったほか、用水や架橋などの土木・建築事業にその卓越した技術を発揮しました。国史跡。



現在でも残る黒川金山坑道入口と石臼

孫子の旗

代記』は伝えています。これ以後、信玄の領国経営が始まります。

繁栄

天下の名僧を招き、学問の地に

武田軍の陣頭に掲げられたのが「諏訪神号旗」と「孫子の旗」。諏訪神号旗は大将旗で、信玄の直筆といわれ、孫子の旗はいわゆる「風林火山」の旗ともいわれ、中国の兵書の言葉が書かれています。信玄が敬愛した恵林寺の快川国師の書といわれます。

信玄は学問の師として天下に知られた岐秀元伯をはじめ、屈指の名僧達を甲斐に招き、最高の知識を学び、自己修練を重ねました。もっとも崇拝したのが、美濃から恵林寺に迎えた快川国師。快川国師から学んだ知識は領国の経営に活かし、国の一層の繁栄を築き上げました。

信玄の「敵を知り己を知れば、百戦危うからず」も「軍勝五分をもって上となし、七分を中となし、十分をもって下となす」の名言も、学問のたまものです。漢詩、和歌、書画などの教養も深く、甲州市の遺宝は、文化人信玄の風貌を彷彿とさせてくれます。